

教」「羸弱思想」であると指摘された。また、当時の真宗は真俗二諦を前提とする教義であったことから、俗諦をないがしろにするものとして、大谷派宗門内部からも非難された。

このほか、犯罪者教誨や軍事情勢(北清事変や馬蹄銀分捕事件、八甲田山遭難事件、日露問題)などに関する言及もあるが、踏み込んだ発言はあまり見られない。また当時話題となった足尾鉍毒事件については、暁烏などはしばしば田中正造に批判的である。清沢自身は、このような社会の個別の事件について直接コメントすることはほとんどなかった。

いずれにせよ、宗教と倫理道德との関係については、清沢の門弟たちの大きな関心事であった。しかし、清沢が巻頭言である「精神界」欄に書いた文章を一覧してみると、創刊当初の清沢自身は倫理道德について積極的には言及していない。清沢が「精神界」欄に書いた文章は、精神主義の思想の概要、精神主義からみた社会的価値と自由ということがテーマの中心であって、倫理道德については少なくとも最初の一年は語っていない。また、「倫理以上の安慰」「倫理以上の根拠」「宗教的道德(俗諦)と普通道德との交渉」といった、晩年の清沢の倫理道德に関する一連の重要な論考も、暁烏が書いた「精神主義と性情」に対する批判を受けて語られたものである。

雑誌『精神界』に携わった清沢の門弟たちは、経済的・物質的な価値観が優先される状況を憂いていたが、一方で、倫理道德が宗教をも支配するとする風潮に対しても警戒した。しかし宗教と道德との関係については門弟たちの大きなテーマとなり、清沢はそれに要請されて自説を述べた。倫理道德というテ

ーマでなくとも、同誌に掲載された清沢の「精神主義と唯心論」は、精神主義は唯心論であるとの批判に応じたものであり、「精神主義と三世」は、精神主義はアキラメ主義であるとの批判を受けて書かれたものである。そのことから、清沢の晩年の思想の一定の部分は、門弟たちの時代意識や問題関心に「応答する」形で表明されたものであると見ることができる。

近代真宗の法蔵菩薩詮釈に関する一考察

——金子大榮を例に——

陳 敏 齡

金子大榮(金子と略す)は曾我量深(曾我と略す)と共に清沢満之「精神主義」門下の双雄である。金子には曾我ほど直接に法蔵菩薩を専論するものはないが、両者は互いに影響しあう面もあるので、曾我説の特徴に合わせながら、金子の法蔵菩薩解釈を考えたい。

一、金子の「因果一如の法蔵菩薩」説は、曾我の「従果向因」の法蔵菩薩説に対応するためである。一般には法蔵菩薩を「従因向果」の菩薩という。曾我は逆観の角度から特に「従果向因」という「因位」の法蔵菩薩を力説する。ところで、金子は知識の面で曾我の「逆観」説を認める一方、他方で感情(感性)の観点から、「順観」・「逆観」の両方が並存している。金子にとって、人間の感情として、「思い出ほど近いものはない」という実態である。「感情的には、前とか後とかということを決定できない」という。金子は恐らく華嚴の「永遠の視野」から、「順観」「逆観」のいずれにもとらわれない所で、「因果一

如」の法蔵菩薩を示そうとしたとも言えよう。

二、金子の「観念界の如来」としての法蔵菩薩は、曾我の「内観の法蔵」の説に対応するためである。曾我の「内観の法蔵」といえば、「法蔵菩薩は阿頼耶識なり」の名言が思い出されるが、如来の本願三心を阿頼耶識の三相に当てはめて解釈するのは、実に「友人の金子大榮」の啓発だと曾我が自述した。

1 金子における本願三心と阿頼耶識三相の対応は、基本的に仏教の「惑・業・苦」という観察から入る。彼は一般の「信楽中心」の通説によって、信楽を「純真なる念仏の心」の自体―「自相」―と見なす上、「罪業」の自覚は至心(至誠真実の心)の反影、「苦惱」の感知は欲生(彼国)の要求という。金子は更に、業と苦という人格的経験の二面の根源を阿頼耶識の因相と果相に辿る上、救済すなわち阿頼耶識三相に対する自覚の説を提起する。

2 本願三心と三世の対応について、曾我はまた阿頼耶識の三相を認識作用の三時に分ける上、如来の三心も三時に当てはめる。金子は、曾我ほど明確に三時の説を立てていないが、欲生心は「未来への救い」と明言される。これを上述した「阿頼耶識の因相と果相」と合わせて見れば、金子の三心における三時の序列が推測できる。しかし、金子は必ずしも三心を固定の時点にとらわれない。彼は本願三心における如来と衆生とのダイナミックな関係に基づいて、至心・信楽・欲生のそれぞれ「対応」「感応」「呼応」の語をもって形容する。金子は結局、西洋哲学や華嚴の時の概念を導入して信の三一論を立てる。

三、「還相の法蔵菩薩」と歴史の接点について、金子の法蔵

菩薩の解釈は基本的に『教行信証』を依拠とするから、何よりも法蔵菩薩における還相廻向の根源性を確認することが中心である。従って、金子も曾我と同様に、「還相の法蔵」の側面が強調されている。これは現実に生きている法蔵精神を喚起する一方、宗教と人間の歴史との接点に繋がるから、仏教史観の問題にも関連する。曾我は「宿業本能」の観点から歴史の底流における「眼に見えない背景」を提起し、「仏教は釈迦牟尼以前より始まる」という仏教史観を宣言する。金子も「時と永遠」の視野に立つて、真宗の宿業観を「還相」の法蔵菩薩の源流と連結する。彼には特に業縁と祖先の概念を本願の歴史に取り入れようとする「宗教感情」が強い。

全体として、金子の法蔵菩薩の解釈には、人間性を中心とする内在的超越の追求である一方、如来の本願は如何に人間の歴史で展開するかという「歴史の自覚」も目立っている。彼には日本人の民族情感と混合する超越的本願史観に傾く側面も否定できないが、「永遠の視野」より、法蔵菩薩の従因向果と従果向因の往還不二の道が闡明されるし、順観逆観の底を貫く永遠なるものが流れているように思われる。

親鸞聖人七五〇回遠忌報恩大法会の実施報告について

藤喜 一樹

一 研究目的と方法

研究目的として、三重県津市白山町にある真宗高田派善性寺(檀家数約二百軒)では、二〇一一年三月二七日親鸞聖人七五〇回遠忌報恩大法会をスムーズに実施したが、準備面において